レッドリスト掲載種の選定にあたって

「改訂・兵庫の貴重な自然　－兵庫県版レッドデータブック 2003－」が出版されて 9 年が経過し、この度、昆虫類を対象としたレッドリスト掲載種の見直しが実施された。改訂作業を進めるために 10 名からなる専門委員会が設置された。各委員は専門とする昆虫群を担当し、2003 年版のリストを参考にして、掲載種の追加や削除、ランクの変更等の原案を作成した。持ち寄られた原案を委員会で精査・検討し、掲載種を選定した。

その結果、2012 年版では昆虫類 292 種が掲載種として選定された。2003 年版と比較すると 39 種の増加となった。特にコウチュウ目での増加が顕著で、19 種に及ぶ。前回は「地域限定貴重種」のランクに 20 種の昆虫類が掲載されていたが、今回の改訂ではより厳密な条件が適用された結果、そのうちの 14 種がリストから除外された。また、前回種名が確定されずに掲載された 6 種についても削除された。

ランク付け評価では 10 種が下位ランクに移された一方、45 種が上位ランクに移された。また、28 種が旧リストから除外され、67 種が新たに掲載種として追加された。個々のランクでは、2003 年版で 8 種が「今見られない」(2012 年版の「絶滅」に相当)とされたが、その内のコガタノゲンゴロウとアカマダラコガネの 2 種は最近県内で再発見され、「A ランク」に移された。一方、全国的にも激減するオオウラギンヒョウモンは「A ランク」から「絶滅」のランクに移された。その結果、2012 年版ではカワラハンミョウ、スジゲンゴロウ、マダラシマゲンゴロウ、アヤスジミゾドロムシ、キイロネクイハムシ、ヒョウモンモドキ、オオウラギンヒョウモンの 7 種が絶滅扱いとされた。

その他のランクでは、「A ランク」、「要注目種」及び「要調査種」で掲載種がそれぞれ 10 種以上増加している。「B ランク」や「C ランク」から絶滅への危険性が高い「A ランク」へ移された 14 種のうち、半数の 7 種は水生昆虫で、水域に生息する昆虫類の生存が危ぶまれる状況が進行していることを示唆している。ちなみに、今回のレッドリスト掲載種 292 種のうち、水中又は水辺に生息する昆虫類は 95 種で、全体の 3 分の 1 を占めている。チョウ類でも 6 種が下位ランクから A ランクに移された。「要注目種」20 種および「要調査種」16 種の増加は、個体数の減少が危惧される昆虫類が増加しており、それらの生息実態の解明の必要性を示唆するものと言える。

今回の改訂でリスト掲載種並びに上位ランクへの移行種が顕著に増加したことは、県内における昆虫類の生活基盤の脆弱さの増大を現している。昆虫類の個体数の減少には生息環境の悪化が一因として関係していると思われるが、その実態は不明なものが多い。最近ではシカの増殖による草本系植物への被害が甚大で、昆虫類減少の大きな原因になっている可能性がある。昆虫類は食物連鎖の要と言われており、生態系の中で重要な役割を演じていると考えられる。したがって、昆虫類の保護は彼らの生活環境の保全と密接に関係して検討していく必要がある。A ランクに位置づけられているウスイイロヒョウモンモドキはその好例で、チョウ類研究家と地元住民の協力により、生息環境の改善を行い、絶滅寸前の本種を日本最大の生息地に蘇らせている。その他にもギフチョウやオオムラサキなどで保護や増殖が試みられているが、昆虫愛好家が中心となって活動しているのが現状である。絶滅が危惧される昆虫類の保護・保全には行政の積極的な参加や支援が不可欠である。

今回の改訂版が県内の昆虫類の絶滅や減少に警鐘を鳴らすだけでなく、適切な保護方策の資料となることが期待される。

最後に、「兵庫県版レッドデータブック　2012」の作成にあたり、貴重な資料並びに情報の提供等、惜しみないご協力をいただいた皆様に厚くお礼申し上げる。

貴重な野生生物等（昆虫類）専門委員会
委員長　内藤　親彦